

国
語注
意

1. 監督者の合図があるまでは問題冊子と解答用紙を開かないでください。
2. 別紙の解答用紙は、マークシート解答用紙と記述解答用紙とに分かれています。指定された解答欄をまちがえないように注意してください。マークシート解答欄は余りがでることがあります。
3. マークシート解答用紙は直接コンピューターにかけますので、折りまげたり、よごしたりしないでください。また枠で囲まれた部分以外には記入しないでください。
4. マークシート解答用紙にマークするときは該当する○にはつきりとマークしてください。
マークのしかた (良い例) ●
(悪い例) ○ × ◎ ㊦
5. (万年筆、ボールペンなどとは使用してはいけません)
マークシート解答用紙に誤ってマークした場合には、消しゴムで跡が残らないようにしていねいに消し、消しかすをきれいに払ってください。
6. 試験開始後、マークシート解答用紙には氏名、受験番号を記入し、さらにその番号をマークしてください。なお、受験番号を記入するときにはマークシート解答用紙の〔受験番号記入上の注意〕をよく読んで、まちがいのないようにしてください。
7. 記述解答用紙には、氏名、受験番号を記入してください。
8. 試験問題はこの冊子の十ページに記載されています。
9. 問題冊子の余白部分は、メモとして利用して構いません。
10. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってください。

I 次の文章を読み、後の問に答えよ。

青年は幾度も槍を投擲した。構える、助走をする、投げる、槍を取りに行く、それを抜いて助走の印まで戻る。これを淡々と繰り返した。こんなにも見事な肉体が躍動しているというのに、競技場を包む静けさはどこまでも変わりがなかった。私の耳に届いてくるのは、スパイクのピンの音、槍が手を離れ飛び出す瞬間の空気を切る音、そして青年が芝生を踏みしめる音、それだけだった。投擲が生み出すそれらの音たちは、静けさの底へと慎ましく吸い込まれていった。青年の邪魔にならないよう、私は咳払い一つせずに息を殺していた。

最初のうち一連の動きを目で追うだけで精一杯だったのが、しばらくすると各動作の形や、つながり方や、それらの意味や、投擲についてのいろいろなことを感じ取れるようになってきた。まず驚かされるのは、何度投げても青年の助走に狂いがないことだった。スタートが四歩、中間が八歩、槍を引いてからフィニッシュまでが七歩。青年の両足はその歩数を正確に刻み続ける。日差しが強くなろうと、風の向きが変わろうと関係ない。4、8、7。4、8、7。4、8、7。その繰り返しが大地でメロディーを奏でる。

助走の間、槍は 2 として青年に身を任せている。無闇に気負ってもいなければ、怯えてもいない。青年の命じるとおりに従えば、それがつまりは善きことなのだ、と信じるかのように心を落ち着けている。

助走のスタートに立った青年が、右肘を折り、肩の上に槍を構える瞬間が私は好きだった。それはいかにも大事なものを身に引き寄せ、一体になろうとしている姿だ。青年と槍、彼らだけに通じる合図が交わされている。十九歩先ではたちまち離れ離れになると決まっているからこそ、 3 A 彼らは親密につながり合おうとする。青年は耳たぶと頬に槍のしなやかさを感じ、槍は彼の掌の中で、揺るぎのない安定を感じている。

もちろん宙を飛んでゆく槍も好きだ。案外それは低い角度で飛び出し、青年の手を離れた途端、様子を一变させる。放物線を描くなどという生易しいものではなく、まるで新たな生命を得たかのように全身を震わせながら激しく空気を切り裂いてゆく。

その震えを目で追いかけるだけで私は胸がどきどきし、このまま槍が滅茶苦茶な方向へ飛んでいってしまったらどうなるのだろうか⁴。うと思ったりするが、心配はいらない。そこには見事な抑制が利いている。槍は青年が見定めた一点を忠実に捕らえ、最も洗練された軌跡を選んで落下する。いや、落下という言葉は適切ではないかもしれない。槍はただ静かに着地するのだ。

いつの間にか太陽は高くのぼり、朝の気配はすっかり消え去っていた。木のベンチはしっとりと温かく、丁度いい具合に窪んでいて座り心地がよかった。観客席の脇で枝を広げるクスギのおかげで、気持のいい影が差し、足元で木漏れ日が揺らめいていた。3B、別の誰かがここへやって来る気配はどこにもなかった。

もう十分槍は遠くまで飛んでいるように見えるのに青年は満足せず、練習はいつまでも続いた。槍を投擲する、ただそれだけの練習だった。槍投げの選手が槍を投げる練習をする、この当たり前の風景がなぜか特別なものに感じられた。私の眼前で繰り広げられているのは、肉体を使う5Aであると同時に、孤独な5Bでもあった。

青年にとっては、槍を投けている時間より、歩いている時間の方がずっと長い。一投ごとに、五十メートル以上先の槍を取りに行き、また助走のスタート位置まで戻ってくる。青年はうつむき加減にゆっくりと歩く。スパイクに踏みしめられる芝生の気配が、私の耳元にも届く。いつしかフィールドに一筋、彼の通り道ができている。

歩きながら青年は考えている。さっきの投擲を頭の中で再現し、修正を施しているのだろうか。次の投擲で試みるべきポイントを、整理し直しているのだろうか。あるいはもつと別の何か、例えば死んだ人のことを、考えているようにも見える。

青年の背中は死者を悼む姿に似ている。死者が倒れ伏した場所まで、3C歩み寄ってゆき、抜け殻となった魂を地面から引き抜く。ついさっきまでの躍動の記憶が残るそれを握り締め、自らに引き寄せ、遠い宙の果てに去ってしまった彼らの声を聞きながら、再びこちら側へと戻って来る。槍を投げることで、青年は黙々と自分の使命を果している。

スパイクの爪先で二、三回軽く地面の印を蹴ったあと、青年は何度目かの投擲準備に入る。髪の前から汗がこぼれ落ちていく。足元には彼が脱いだ洋服と靴とリュックサックが、一塊になって置かれている。逆光の中浮かび上がる肩の筋肉を、私が目

でなぞっている間に青年は槍を握る。すぐさまそれは地面と平行になり、肩の上の定位置に納まる。彼らが一体となる、私の最も愛する姿だ。誰が合図を送るわけでも、どこかでピストルが鳴るわけでもなく、彼一人が決心した最良の一瞬でスタートが切られる。

最初の四歩はあくまでも軽い。体中ほとんどどこにも、槍を握る指にさえ、力が入っていないかのようなのだ。これから訪れる爆発の予感、は筋肉の奥深くに潜んだままで、まだ目には見えない。しかし既に準備は整っている。

五歩めからは明らかに、スパイクの音も髪の流れ方も息遣いも、すべてが違ってくる。みるみるスピードが上がり、その勢いが両足から上半身へと蓄えられてゆく。ああ、このまま彼はどこまで行ってしまうのだろう、と私は胸が詰まる思いにとらわれるが、青年と槍の一体感はいささかも失われてはいない。それどころか今や槍は青年の筋肉の一部となり、けん腱の一筋となり、精神の支柱にさえなっている。

やがて十三歩めを迎えると、槍は後方へ引かれ、上体がねじれ、足が交差し、体の部位は次なる次元へと移行をはじめ。いよいよなのだという予感が抑えきれなくなり、私は両手を胸の前できつく合わせる。青年の視線ははるかな一点に定まり、それはもう決して揺るがない。

胸が開き、右手は一杯に引き伸ばされ、両足によって大地からくみ上げられた力が青年を満たす。全身の筋肉は、ただ宙の一点に飛んでゆく槍のためだけにすべてを捧げている。その時、筋肉たちは最も美しいラインを描き出す。上体が沈むとともに左足に体重が乗り、肩を支点にして斜めに向いた槍の先端と、青年の視線が重なり合う。極限まで引き絞られた肘と肩が、次の瞬間、槍を解き放つ。右足の甲が地面を削る。

まるで

7

かのような。青年から託されたものを身にまとい、その重さに畏怖を抱きつつ槍は震えている。青い空で銀色の直線がきらめいている。もはや青年は何もできず、無言でそのきらめきを見送る。槍は神の描いたラインをなぞってゆく。

（小川洋子『人質の朗読会』第六夜 槍投げの青年「より」）

問一 傍線部1「息を殺していた」にもっとも近い意味のものを次から選び、その数字をマークせよ(解答欄はマークシート a)。

① 集中していた

② 緊張していた

③ ぼんやりしていた

④ くつろいでいた

⑤ じっとしていた

問二 空欄2に入るもっとも適切な語を次から選び、その数字をマークせよ(解答欄はマークシート b)。

① 自然

② 毅然^き

③ 惘然^ぶ

④ 悠然

⑤ 啞然^あ

問三 空欄3 A、3 B、3 Cに入る組み合わせとしてもっとも適切なものを次から選び、その数字をマークせよ(解答欄はマークシート c)。

① 3 A 一歩ずつ

3 B 相変わらず

3 C いっそう

② 3 A いっそう

3 B 相変わらず

3 C 一歩ずつ

③ 3 A 相変わらず

3 B いっそう

3 C 一歩ずつ

④ 3 A 一歩ずつ

3 B いっそう

3 C 相変わらず

⑤ 3 A いっそう

3 B 一歩ずつ

3 C 相変わらず

問四 傍線部4「このまま槍が滅茶苦茶な方向へ飛んでいってしまったら」と文中の「私」が案じたわけとして、ふさわしくないものを次からひとつ選び、その数字をマークせよ(解答欄はマークシート d)。

① 槍の動きを追えなくなりそうだったから。

② 槍の動きに生々しい力を感じたから。

③ 青年の投擲の失敗も分かるようになったから。

④ 槍の暴れ出す姿を想像してしまったから。

⑤ 槍が自由を手に行っているようにも思われたから。

問五 空欄 5 A、5 Bに入る組み合わせとしてもっとも適切なものを次から選び、その数字をマークせよ（解答欄はマークシート e）。

- | | | | | |
|---|-----|----|-----|----|
| ① | 5 A | 運動 | 5 B | 運動 |
| ② | 5 A | 競争 | 5 B | 運動 |
| ③ | 5 A | 競争 | 5 B | 思索 |
| ④ | 5 A | 思索 | 5 B | 競争 |
| ⑤ | 5 A | 運動 | 5 B | 思索 |

問六 傍線部 6「ああ、このまま彼はどこまで行ってしまうのだろう、と私は胸が詰まる思いにとられる」理由を、解答欄に即して記述解答用紙の I 6 に二十字以上三十五字以内で答えよ（句読点も一字と数える）。

問七 空欄 7に入るもっとも適切な表現を次から選び、その数字をマークせよ（解答欄はマークシート f）。

- ① 青年は、エネルギーを使い果した
- ② 槍は、青年を地に置き去りにした
- ③ 青年の身体が、地を這い出した
- ④ 青年の一部分が、天に差し出された
- ⑤ 槍のソロダンスが、始まった

Ⅱ A 次の1～3の（ ）内のカタカナを漢字に直し、4～6の（ ）内の漢字の読みをひらがなで記せ（解答欄は記述解答用紙Ⅱ1～6）。

- 1 人生の（フシメ）を迎えた。
- 2 マイクロプラスチックによる海洋（オセン）は、まだ十分に対処されていない。
- 3 大河は平原を（ダコウ）しながら、海に向かって流れていく。
- 4 今まさに人生の（岐路）に立っている。
- 5 このエッセイは（含蓄）に富んでいる。
- 6 捕虜を（虐）げてはならない。

Ⅱ B 次の7～10の（ ）内のカタカナと同じ漢字が当てはまるものを①～⑤からひとつ選び、その数字をマークせよ（解答欄はマークシート

g

 ～

j

 ）。

- 7 その作品は大きな話題となり、（ジ）目を集めた。
① 「ジ」戒する ② 「ジ」悲深い ③ 誇「ジ」する ④ 牛「ジ」る ⑤ 「ジ」震速報
- 8 賃金の引き上げを（ヨウ）求する。
① 雨模「ヨウ」 ② 耐熱「ヨウ」器 ③ 和「ヨウ」折衷 ④ 事務「ヨウ」品 ⑤ 指導「ヨウ」領
- 9 原因を（セイ）査する。
① 野党が「セイ」力を伸ばす。 ② 「セイ」論を振りかざす。 ③ 「セイ」根尽き果てる。
④ 「セイ」濁併せのむ。 ⑤ 「セイ」御不能
- 10 美術館で絵画を鑑（ショウ）し、やわらかな色遣いに心を奪われた。
① 「ショウ」進試験 ② 「ショウ」味期限 ③ 「ショウ」介状 ④ 舞台「ショウ」明 ⑤ 「ショウ」利宣言

Ⅲ 次の文章を読み、後の問に答えよ。

ほととぎすの声まだしらねば、いかにしてか聞かばやと恋しがるに、人の訪ひ来て、「何かは聞えぬ事のある
が宿の大樹にはとまりてさへ鳴くものを、夜ふけ枕にこころし給へ。近く聞く時は唯一こゑあやしき音に聞きなされるれど、遠く
なりゆく声のいと哀れるなぞ」と教へられき。

時は旧き暦の五月にさへあれば、おのが時たゞ今と心いさみて、それよりの夜な夜な目もあはず、いかで聞きもらさじと待わ
たるに、はかなくて一夜は過ぎぬ。そのつぎの夜もつぎの夜もおぼつかなくて、何時しか暁月夜の頃にもなれば、なかくば
かり物はおもはする、いとつれなくもあるかなと憎くむ憎くむ猶まつに弱らで一夜を待あかしに、ある暁のいとねぶうて、物
もおぼえずしばし夢結ぶやうなりしが、耳もと近くその声あやまたず聞えぬ。まだ聞かざりし音をさやかに知るは怪しけれど、
疑ひなきそれと枕おしやりて、居直れば又一こゑさやかにぞなく。故人がよみつる歌の事などさまま胸に迫りて、ほとほと涙
もこぼれつべく、ゆかしさのいと堪へがたければ、閨の戸おして大空を打見あぐるに、月には横雲少しかりて、見わたす岡の
若葉のかげ暗う、過ぎゆきけんかげも見えぬなん、いと口惜しうもゆかしうも唯身にしみて打ながめられき。

明ぬれば歌よむ友のもとに消息して、このほこりいはばやとしつるを、事にまぎれてさて暮しつ。夜に入れば又々鳴きわたる
よ。こたびは宵より打しきりぬ。人の聞かせしやうに細やかなる声はあらねど、唯ものの哀れにて、げに恋する人の我れに聞か
すなと言ひけんも道理ぞかし。おもふ事なき身もと、すずろに鼻かみわたされて、日記のうちには今宵のおもふこと種々しるし
て、やがて哀れしる人にとおもふ。

かくて二日ばかり、三日の後なりけん、ゆくりなく訪ひ来し友あり。いと嬉しうて、今やこの事かたり出ん、しばししてや驚
かすべき、さこそは人の羨やましがるべきをと、嬉しきにも猶はばかられつつ、あらぬ事とも言ひかはすほどに、折しもかの
子規軒端に近う鳴く声のする。「あれ聞き給へ。此宿はこころの森にもあらぬを、この夜頃たえせず声の聞ゆるが上に、ひるさ
へかく」と打出したれば、友は得ときがたきおももちして、「何をかのたまふ」とただに言ふ。かくかくと語れば、「それは承けがた

き事」と打かたぶき打かたぶきするほどに、又も一声二声うちしきれば、「あれが声を郭公^{ほととぎす}とや。いかにしてさはおぼしつるぞ、いとよき御聞き^{おんき}さま」と、友は口おほひもしあへず笑みくつがへる。「いつも暁よりなきいでて夕ぐれまでは御軒^{おんのき}のものなるを、いかにしてさは聞き給ひけん、物ぐるほしくもおはしますかな」といよいよ笑ふに、「さにはあるまじ。いかで山がらすをさはおもふべき。あの鳴^{なく}ね聞き給へ、よもあやまらじ」と不審^{ぶさ}かしうなりて言へば、「月夜に寝ほうけて鳴出る時は常の声とも異なりぬべし。今のなく音は何かは異ならん。あれ見給へ、飛びゆく姿もさやかなるを」と指さされて、あはれこの子規^{はつ}いつも初音をなく物になりぬ。覚めずは夢のをかしからましを。⁶

（樋口一葉「ほととぎす」）

注　　こごゐの森　　伊豆山神社（静岡県）の裏手に広がる森。古くからホトトギスの名所として知られる。古々井、子恋とも。

問一　空欄①にあてはまるもつとも適切な語を次から選び、その数字をマークせよ（解答欄はマークシート k）。

- | | | | | |
|-------|--------|-------|-------|--------|
| ①　　べく | ②　　べかり | ③　　べし | ④　　べき | ⑤　　べけれ |
|-------|--------|-------|-------|--------|

問二　傍線部②「五月」の別表記として適切なものを次から選び、その数字をマークせよ（解答欄はマークシート 1）。

- | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| ①　　卯月 | ②　　葉月 | ③　　文月 | ④　　如月 | ⑤　　皐月 |
|-------|-------|-------|-------|-------|

問三 傍線部3「故人がよみつる歌」の例としてそぐわないものを次からひとつ選び、その数字をマークせよ(解答欄はマークシート)。
m

- ① ほととぎすみ山出づなる初声をいつれの宿のたれか聞くらん
- ② いつのまに五月来ぬらむあしひきの山時鳥今ぞ鳴くなる
- ③ 五月雨に物思ひをれば郭公夜ふかく鳴きていづちゆくらむ
- ④ 新らしき野菜畑のほととぎす背広着て啼^なけ雨の霽^はれ間を
- ⑤ 時鳥鳴く声聞けば別れにしふるさとさへぞ恋しかりけり

問四 傍線部4「げに恋する人の我れに聞かすなと言ひけん」は『古今和歌集』所収の「夏山になく郭公心あらば物思ふ我に声なきかせそ」(詠み人知らず)を踏まえた言葉である。この歌にある「物思ふ我に声なきかせそ」について、「恋」の語を用い、「声なきかせそ」と言う理由が分かるようにして、記述解答用紙のⅢ4に二十字以上三十字以内で現代語訳せよ(句読点も一字と数える)。

問五 傍線部5「いとよき御聞^{おんき}きざま」に込められた言外の意味は何か。もつとも適切なものを次から選び、その数字をマークせよ(解答欄はマークシート)。
n

- ① 皮肉
- ② 感心
- ③ 驚嘆
- ④ 羨望
- ⑤ 怪訝^{げん}

問六 傍線部6「覚めずは夢のをかしからましを」とは、どのような思いからの言葉か。もっとも適切なものを次から選び、その数字をマークせよ（解答欄はマークシート

0

 ）。

- ① やはり月夜の夢の中の出来事だったのだ
- ② 実際の姿を見たら気持ちが悪くてしまった
- ③ 実在を信じたから愛しい本物に会えたのだ
- ④ 夢と現実を混同して大変恥ずかしいことだ
- ⑤ ずっと思い込んだままで過ごせばよかった